

その年の秋

村野 宏子

焼け跡が広がっている。瓦礫の石ころの上に新聞紙を敷いて坐った。

尻だけが痛い。おにぎりをほおぼる。見たす限り、何もない。伊勢丹、

寄席の建物、映画館の三つのほかは何もない。「ああ、どうしてこんなに

焼けちゃったんだろう」「ひでえことするなあ、アメリカは」「新宿、こ

んなに焼け野原にして、アメリカって嫌だなあ」「ここにいた人はみんな

どこへ行っちゃったんだろう、死んじゃったのかな」。

いたのは従妹（父竹中延太郎の弟の娘）とその女友達二人と私。みんな、田舎から来て初めて見た。新宿がこんなになるとは知らなかった。

戦争に負けた年の秋のことだ。私は四月で満十九歳を迎えたばかり。

連れの三人は少し年下。映画が見られる。見たくてしようがない。期待

に胸が張っていた。「楽しみだねえ、きれいな服装をした女優さんが見ら

れるなんて」。なんだか夢を見てみたい。焼け跡の四人、ぺちやくちや

が止まなかった。

おにぎりは竹の皮で包んだ。梅干しにわざわざ米の御飯を握った。当

時は多くの農家が麦飯だった。布切れがかぶさったブリキの水筒も持参

した。わが竹中家自家製のお茶が入っていた。梅干しも米も同様。米は

精米屋に出したが。東京郊外の大きな農家、餓えは知らなかった。新宿

へは五日市線の東秋留駅から拝島を通って立川へと汽車ぽっぽ、立川か

ら新宿まで中央線は電車だったはずだが覚えていない。新宿駅の姿も思い出せない。

映画館は大満員。おにぎりを食べながらのんびりし過ぎてしまった。

瓦礫の坐った場所から映画館がよく見えなかった。そんなに人が来て

るとは思わなかった。遅れた罰が中つての立見席。「こんなに早く来て坐

れないんじゃないか」「何だよ、尻が痛いじゃないか」。

映画の筋は記憶にない。並木路子が林檎の一杯生つてるところで林檎

を手に取って胸元で見せるようにしながらニコツと明るく唄っていたば

かりだ。映画が始まる時、大入りの場内からウォーという大歓声が挙が

った。

暗くて熱っぽい館内。すると足と尻がもぞもぞ。連れを見ると私の横

と前。振り返ると、若い男が立ってニヤツとした。兵隊帰りの野郎か。蹴

つ飛ばしてやった。どこにぶち当たったかはわからない。慌てて見えな

くなった。スカートを履いていた私。「ひろこちゃん、すげえじゃないの、

相手、こそこそ逃げたって」。

帰途、新宿駅までの瓦礫の中、大満足の大きな声で「あくかくい、り

んごに、くちびる、よくせて」と唄った。「ひろこちゃん、もう覚え

たの」。車中では小さな声で唄った。「りくんこの、きもちいわ、よくわ

くかゝるって何だべ」「りんご、食わせちゃうなあ」「栄養になるからいいか」。

生け花を習っていた。真つ暗な田んぼの中の道に行く。懐中電灯で足元を照らしながら。懐中電灯は自転車の前にあるような四角いやつ。ここでも新宿で映画を見た三人と一緒に。みんなで元氣よく林檎の歌を唄って歩いた。隣の野辺村の農家の一室に疎開していた池坊の女の先生の所に向かったのだ。背の低い、むっちりした四十代の女性。水盤でなく竹筒に花を活けた。「おうちの庭に咲いている、自分の好きなお花を持っていらっしやい」。田舎だから自分たちで花を持ち込む。紫陽花、青木の実、菊の花など。先生には茶の湯も習った。何もないので袱紗捌きのみ。先生も生徒も、下はモンペ、上は縞の着物を上半分に切ったような……「標準服」の恰好だった。月謝はサツマイモ。竹の子でも。金銭も。直近の戦時中はお茶やお花どころではなかった。

七月十八日の横須賀への空襲で鎮守府の海軍病院を負傷して焼け出された。久里浜の病院で敗戦を迎える。二宮の実家に戻った。赤羽の小学校の養護訓導にならないかと日赤から通知が来た。戦火闌なる時に母が急逝、父は軽い脳卒中に罹り、すぐ上の姉末子が家の面倒をみていた。こどもの頃、川で溺れかかったところを「背中のにれえ」と助けてくれた姉だ。作代のカネさん、カズさんが田畑をやってくれてたが、こ

のままでは姉はお嫁にいけなくなると思った。私は赤羽に行かなかった。その年の秋、末っ子の私はよく遊んだ。何人かで相模湖に出かけた。御岳山へ日赤の友と登った。山中で傷痕軍人と知り合った。その人は日赤の看護婦の悪口を言った。態度がきついとか言った。私らの正体を察すると恐縮したようだった。日赤のわが友石井はつさんの墓参りは何度もした。その都度お母さんと話をした。

竹中家では柿、茱萸、栗、梨、ドドメ（桑の実）、苺、葡萄が採れた。小屋の中に味噌、梅干し、漬物を保存した。林檎は病人の食べ物と思っ

てた。わが村二宮には商人が多く、八百屋で林檎も売っていた。買い出しにやって来る人たちがいた。横浜国立大学の先生がたである。親戚にこの大学の事務をやっているのがいた。こちらからは米、麦、サツマイモを出した。おカネのみならず衣類との物々交換もやった。竹中家の敷地には大きな深い穴倉があつて、梯子をかけて下に降りた。サツマイモを蓄えていたのだ。

以上は七十五年も前の話。当時の友たちは天国で楽しく歌って飛び歩いている。

心はいい。体がづらい。

「ひろこちゃん、何をもたもたしてるの」。

(了)

(令和二年五月満九十四歳・口述筆記)